転生勇者とリア充の呪い

まふおか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生勇者とリア充の呪い

【Ｎコード】
Ｎ９８５７Ｘ

【作者名】
まふおか

【あらすじ】
勇者は長年続いた災厄を終わらせた。しかし大いなる災厄をその身に引き受けたため、別の世界に転生することになった。しかし道連れにした災厄がたたり、呪われることに。しかもその呪いは特殊な条件下で発動するらしい。元勇者は前世の記憶をもったまま地球で人として生を享け、幾たびも転生する。
時は流れて２１世紀の日本。高校生になった元勇者は呪いを回避して無事リア充になれるのだろうか。

※　ブログ「まふおか家」にて連載中の自作小説を転載しています。

第1話　勇者の最期

古代都市の残骸。瓦礫の山。大地の裂け目からしゅうしゅうと漏れる瘴気。その濃い瘴気越しにぐねぐねとのたうちまわる太く赤黒い、触手の群れ。だらしなく開かれた大きな口の端から溢れる緑色の粘液。ぬらぬらとぬめる見開かれた大きな眼は充血し瞳孔が大きく開ききって焦点が合わないのに、こちらを凝視しているのが分かる。

「災厄の源」と呼ばれる大きな怪物と、俺は対峙している。それの放つ憎悪の気はこちらを圧し潰しそうなほど大きく強く、そしてその強さゆえに、因果を超えた憎悪は鮮やかで、純粋ですらある。

やっとここまでたどり着いた。

今こそ、この災厄の源を断ち切り、世界に平和を……！

「いけません！」

「やめろ！　何もそこまで」

友の叫ぶ声が切れ切れに聞こえるがもう俺は迷わない。剣を構え汚濁につっこむ。ざくっと刺さった剣をぐいぐいと押し込み、最後の力を振り絞って災厄の源の核を切り、刻み、潰す。腕や足、首に絡みつき締め上げる触手を振りほどかず、術を展開する。災厄の源の断末魔の叫びが撒き散らされる中、俺はもくろみの成功を確信した。

「怪物よ、相討ちだ」

この世界を破滅に導く憎悪の主は滅んだ。ただ、災厄の源を倒しはしたものの、滅することはできなかった。災厄の根が残ればそこからまた憎悪が育ってしまう。戦いで傷つきすぎた俺はどのみち生きながらえることができない。だから相討ちを選んだ。最後の術は、倒した災厄の源を根こそぎ体内に取り込む禁呪だ。道連れにされた災厄の源は今、ともに滅するさだめから何とか逃れようと俺の体内でのたうちまわっている。

決戦の舞台である古代都市の遺跡は今、静かだ。藍色の夜空は澄んでどこまでも高く、たくさんの星々が瞬いている。瘴気がないとこんなにも風がひんやりしていて、そして、空気が甘い。

人々にいつくしまれ、神々に愛された俺はこの世界を守ることができたんだな。よかった。

「行ってはいや」

傍らにひざをつく聖女が必死になって癒しの術をぶつけてくる。時間稼ぎにしかならないと分かっていて術を行使しているのか。埃と汗ですすけていても、俺を失う恐怖に顔を歪めていても恋人は美しい。癒しの才能を持ち、冷徹なほど知略に長けた聖女。ちょっと嫉妬深くてしつこいところもあって、そういうところも大好きだった。戦いから戻った暁に、と約束していたのにかなわなかった。すまない。でも一度だけキミと見上げた星空がこうして戻ってきた。泣かないで。

もう手足の感覚がない。

まわりに旅の仲間や、戦いの終わりを知った各国の為政者、神殿の大神官が集まっている。

世界の災厄を断ち切る代わりに、この身に引き受けた。人々と神々の慈愛により人として限界まで拡張した能力すべてを使い災厄の

源を抱きしめ、道連れにして俺は死ぬ。
道連れにしなければ俺自身が災厄の源となってしまう。
残された僅かな時間で、人々はさまざまな祝福を俺に施した。
ある魔法使いは別の時空に魂の器を探しもとめた。
ある神官は魂に強靭な防護の術をかけた。
ある為政者は政の、ある吟遊詩人は音律の才を魂に刻んだ。
ある薬師は草木のことほぎを、ある学者は天地のことわりを注ぎ込んだ。
ある占い師は未来を予見し、警告を与えた。
旅の仲間はただただ勇者である俺を惜しみ、慟哭した。
そして戦いから無事帰還した暁に結婚を、と約束していた聖女は涙をほろほろとこぼしながら「うそつき」と愛らしい唇から恨み言をこぼし、それでも「とこしえに人々に、神々に愛されますよう」と祝福してくれた。

この後、よい世の中になって人々が栄える様をこの目で見られないのは残念だ。ああ、寒い。折角晴れ晴れと清らかな星空なのに視界が朧でもうよく見えない。体内に取り込んだ災厄が暴れる。苦しい。痛い。寒い。
でも、いいんだ。俺は十分にこの世界に愛された。
満足感と、体内でのたうち暴れまわる災厄とともに俺は、死んだ。

第2話　元勇者は不可解な呪いとともに転生する

前世の記憶、といえばいいのか。俺は別の世界で勇者をやっていたことがある。

勇者としての最後の仕事は世界の災厄を道連れに死ぬこと。勇者として生まれ愛された世界のその後を見届けることができなくなる代わりに別の時空で生きることができるが、身に引き受けた災厄がたたり、ある条件で発動する呪いも負う。

別の時空で送った短い人生。鍛錬と学習とを繰り返し、ひたすらに苦難と試練を重ね、ようやくたどり着いた最後の戦い。その後の栄光を味わうことなく終わり、次の機会にはぜひ平凡な人生を、と望んだ勇者としての記憶は薄れつつある。地球に転生して以来、すでに何度も輪廻したが、呪いについての警告はまだ覚えている。

未来を見通す確かな眼を持った占い師の御婆が与えてくれたその警告は、意味が分からないものだった。

「神々とわれらの愛し子たる勇者よ、おぬしの引き受けた世界の災厄は大きい。道連れにして無に帰してもなおおぬしを呪うであろう。

おぬしにかけられた呪いは女難じゃ。

転生した先で男であるとも限らぬから、女として生を享ければ男難かの。まあ男であっても男を、女であっても女を愛するさだめもあろうからの、とにかく恋人や連れ合いがとんでもない相手であったり、とんでもないめに遭ったりする、そういった類の呪いじゃの。

しかしおぬしが慎重に振舞えばその呪いを避けることができる。大事ゆえきっちり覚えておくがよいぞ。

爪の先ほどの小さな隙間、そこに細かな網目が見える。その小さな隙間と愛を語らってはならぬ。この戒めを破ればおぬしは大いなる苦しみに見舞われるであろう。

それにしてもなんじゃ、この呪いはけったいじゃの。ずいぶんこんがらがっておるようじゃ。二重……、はて、三重にかかっておるのかの？

……あ？　なんじゃ？　時間がないとな？　何だか、こう、もうちょっとでほどけそうな感じがするんじゃがのう。ま、仕方ないかの。……げふんげふん。

他の世界の、しかもいつ起こるか分からぬ先々の事柄ゆえ、わしにはその意味がまったく分からぬ。ただ、板切れに空いた小さな隙間に細かな網目があること、おぬしがこの板切れに頬を摺り寄せ網目に向かって愛の言葉をささやくと呪われること、この二つは確かなのじゃ。

この呪い、よくよく覚えておくのじゃ。そして何が何でも避けるのじゃよ。

呪われることなく、幸せに過ごすがよいぞ。」

あれ？　未来を見通す確かな眼を持ってるはずの御婆に見切り発車的占いをされた気がするよ、俺。

それにしても、何が哀しくて板切れに頬ずりしなきゃならんのだ。「小さな隙間と愛を語らってはならぬ」というのがそもそも分からない。

呪われると、途端に「呪われた！」と自覚するものなのだ、と聞いたことがある。

ある者は呪われた途端にずっしりと他者に見えない重荷を死ぬまで負い続けたという。

ある者は呪われたその瞬間に顔に呪印が現れたという。

呪いにも色々あってただ本人が不幸なだけであればともかく、いや、それもいやだけど、他人も巻き込む類の呪いだともっとまずい。女難（男難？）の呪いであればまず間違いなく独り相撲というわけにはいかない。恋人だのパートナーだの、とにかく自分以外の人間を巻き込む。

徹底して回避すべし。

とにかく一目惚れとか雷に打たれたような大恋愛とか、そういう小さな隙間を見逃しそうになるのは避けて慎重にいこう。

今のところ人間として生を享けていて、幸いそんな珍妙かつシュールな場面に遭遇したことはない。もしかして記憶にないところでモノとして転生して小さな隙間の細かな網目とキャッキャウフフしちゃったんだろうか。想像がつかない。

強いて言うならば前々回の人生で、もしかしてこれか？　というのがあった。フェンシングのマスクだ。しかし網目は細かいけれど「爪の先ほどの小さな隙間」ではない。そもそもフェンシングのマスクは板切れじゃない。だからといって安心できようか。いかに妖怪もモンスターも亡霊も神もいない世界だとは言え、何があるか分

からない。マスクの付喪神が現れて俺の心をわしづかみにする、などというフェイントをかけられるかもしれない。念のためフェンシングの最中に恋バナをしないよう用心したが、自分のもの、他人がかぶっているものに関わらずマスクに向かって愛を語ることは結局なかった。このときも呪いは発動せず、平凡ではあったが幸せに人生を全うすることができた。

転生後、男であったことも、女であったこともあった。望みどおり、身の丈にあった力と生活、ただ生命の鎖をつなぎ次の世代へとバトンを渡すためにベストを尽くす、そんな平凡な人生を数回送ってきた。戦争があり、災害があり、疾病があり、どの生にも必ず別れがあり、ただ楽しいだけの人生は一度としてなかったが地に足のついた生活はおおむね幸せだった。

この世界は一人の勇者に慈愛を傾けるのではなく、満遍なくどの人生にもチャンスがあり、そして前触れなく奪われる。幼子のまま死んだ人生もあったが、それでも俺は人としての生を重ねるごとにこの世界への愛着を増した。チャンスがあれば必ずそれを掴み、生かすこと、それが前世の記憶を持ったまま転生を続ける俺の、世界への返礼だ。

そして21世紀、60年以上戦争のない平和が続いている日本の首都東京で俺は高校生になった。

第3話　元勇者は誇り高く、そしてその分小心である

今回は恵まれた人生を送っている、と今のところ思う。
俺は原口勇。黒髪黒い瞳、日焼けして浅黒い肌をした典型的な日本人だ。身長１８５センチでがっちりとした体格、幼いころからラグビーで鍛え、勉強も手を抜かない。ずば抜けているとはいえないが、そこそこに身体能力知力ともに高い。ぎょろりとした大きな目、太く高い鼻、分厚い唇という野生的な外見と無口で愛想がないところから硬派で威圧的だという印象を他人に与えるらしい。ただ傲慢でないし、無口でも礼儀正しく丁寧な応対を心がけているので、老人と子どもには好かれる。今のところ恋人はいないが、まだ高校生だ。部活動に勉強に、と忙しい現在、すぐに恋人が必要だとも感じないから焦る必要もない。負け惜しみではないぞ。決して。もてるタイプではないが女子に嫌われているとも感じない。

友人には「チートレベル」などと揶揄されるが、記憶は薄れていてもチート人生経験者からするとこの程度ではチートと言えない。だから事実のまま
「努力をしているだけだ」
と返すこともあるのだが、そうすると
「ぎゃー、かっこよすぎるぅ」
とさらに騒がれてしまい、今ひとつよろしくない。

実は面倒くさがりな性格で機械と押しに弱いのは秘密だ。
機械音痴は重症で、計算機でさえ気がつくとうんともすんとも言わなくなってしまう。いまどきパソコンやらインターネットやらを

使わない高校生は少数派であるが、存在しないわけではない。しかしこれを放置すると現代社会では相当に困る事態に陥る。だからかなりがんばった。例えばマウスを握りつぶさずに操作する力加減についてメモするのにノート3分の1を消費したり、とパソコンを壊さずに使えるようになるのにずいぶん苦労したものだ。ワープロソフトと表計算、メーラー、インターネットブラウザと一通り使える程度には習得したので、現在はできるだけ関わらないようにしている。

神々の慈愛が極端に偏らないこの世界において、俺はやはり幸運なのだと思う。両親との関係も良好だ。

「勇、学校のお友達はみんな携帯電話を持ってるんじゃないの？」

母親からおねだりプレッシャーをかけられた。

母親というものは大なり小なりそうなのだが、この人生における母親は特に俺を甘やかしたがる傾向がある。ママ友なる、一度踏み入れると足を洗うのに苦労するとか言うネットワークにおいて聞かされる愚痴のひとつに「子どもから携帯電話をねだられて困る」というのがあるんだそうな。愚痴なんだから望ましくない事態なんだろうに。身長１８５センチを超えてもなお成長し続ける巨体をよじりつつ

「だって、友達はみんな持ってるんだもん！」

とか何とかごねておねだりする息子の姿を見たいんだろうか。うちの母親は変わっている。

「勇はよく頑張ってるからな、父さんも母さんに賛成だぞ。それに

お前なら使い方を間違えたりしないだろう」

父親も甘やかしたいらしい。ただ、闇雲に息子を信じているように見せかけて予めハードルを高めに設定するあたり、母親よりクレバーだ。父親は大手メーカーで中間管理職に従事している。これも人心掌握術のひとつなのだな。なるほど。シーンを変えても応用できる、汎用性の高いワザだ。覚えておかねば。

それにしても、困った。携帯電話か。

携帯電話といえば機械。それも精密機械ではないか。気軽に触れると確実に壊す。3年に1度程度の頻度であれば買い替えタイミングと言い訳できなくもないが、下手をすると機械音痴という恥ずかしい短所がばれてしまう。家族や友人の大事にしているものをめきょっと潰してはたまらないので他人の携帯電話であっても触ったことがない。家族や友人などが使っている姿を見るに、これは携帯するだけで触らなきゃいいんじゃないか、と楽観視できるタイプのツールであるとも思えない。持たされたら最後、電話やらメールやら、と1日に何度も触ることになるんじゃないか。困る。仮面ライダーの変身ベルトのボタンを押し損ねてひねりつぶし、ニン☆ンドーDSのソフトであるチップを割り、液晶画面にひびを入れ……そのたびにしょんぼりと肩を落とす俺の姿を見ている、この人生において最も付き合いの長い両親には

「もしかしてこの子、ちょっと残念な感じで機械が苦手なんじゃ」

と疑われる程度に露見しているような気がする。

父親から

「人には得手不得手というものがある。無理に不得手なところをど

うこうしようと思わなくても得意なところを伸ばせばいいんだよ。だから父さんは英語が必要なときは通訳を頼むんだ」

とかなんとか言われた。

なんだか父親自身の言い訳成分含有率が高かったような気がするが俺は慰められたんだろう。

ちなみに俺の場合コミュニケーションスキルも割りと高いし、地道な努力の積み重ねでどうにかなるジャンルである外国語はわりと得意だ。

それはともかく、携帯電話。中学生のころから使ってきた伝家の宝刀的言い訳、

「まだ俺には早いよ。連絡は公衆電話で済むからなー。いつかは使うようになるんだし、今じゃなくてもいいと思う」

で今回もしのぐか。

そう思ったのだが、そうもいかなくなった。

先日、顧問に呼び出された。クラブの中でも携帯電話を持たない部員は俺だけらしい。急場の連絡に困るんだよね、と顧問から世間話の体でやんわりと携帯電話を持つよう要求された。……普通、携帯電話は校則で不要なモノ扱いにして規制しましょうねー、とかなんとかなるんじゃないのか？　顧問、あなたもなのか？　みんながみんな、俺に機械を与えたいのか？

携帯電話。機械音痴なのできっと壊してしまう。つるりとした冷たい物体なのに、それがまるで生まれたての仔猫のように心もとなく脆い存在に思える。操作を覚えられるかどうか以前に握り方やボタンの押し方の力加減に不安を感じる。今回もノートにメモしまくって壊さない使い方をマスターするしかないのだろうか。なんと面倒な。

こうしてきれいに外堀を埋められた俺は生まれて初めて携帯電話を手に入れた。機械音痴という恥ずかしい欠点を隠しながら克服すべく、当面は家族と部活動関係者のみ、通話も電子メールも主に受信、インターネットはほぼ不使用、と機械そのものとの接点を減らすことにした。弄り倒してすぐに壊してしまうのでは、いずれ機械音痴がばれてしまう。

元勇者というのは誇り高く、そしてその分だけ小心なのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9857x/

転生勇者とリア充の呪い

2011年10月28日03時14分発行